モザンビーク・ショクエで稲生産プロジェクト

アフリカ大陸の東南部に、マダガスカル島と海峡を挟んで、海岸線の長いモザンビークという国があります。面積は日本の２倍強の約 80 万平方キロメートル、人口は 2390 万人（2011 年）です。熱帯性・亜熱帯性気候ですが、アフリカ大陸の中では高緯度（南半球）の地域にあるため、国の南部では冬季の平均気温が 20 度以下になり、５月から９月の期間は凌ぎやすい気候のもとで過ごせます。

17 世紀から 1975 年の独立までポルトガルの支配を受けて、ポルトガル語を公用語とするアフリ５ヵ国のひとつです。首都は当初モザンビーク島にありましたが、1898 年に、当時のロレンソ・マルケス、現在のマプトに移されました。マプトは、東アフリカのほかの主要都市とは街並みや建物の印象が少し異なり、ラテン文化の影響を感じます。マプト湾とインド洋に臨み、歴史的な建造物が整然と植えられた街路樹に映える瀟洒な地区が残っている街です。

独立後約 17 年間、反政府軍との内戦状態にありました。1992 年に和平協定が調印され、その年末から約２年間にわたり、国連モザンビーク活動の和平プロセスが実施されました。日本は 1993 年からこの PKO の活動に参加して、選挙監視業務に地方自治体からも参加したので、このころからモザンビークの国名がよく知られるようになりました。

長く続いた内戦、紛争と社会主義体制下の経済運営により国土が荒れ、国民は翻弄されましたが、1990 年に自由市場経済を規定した新憲法を制定してからの 90 年代は、荒廃から復興へと着実に歩み始め、90 年代後半の経済は順調な発展を見せていました。モザンビークは、旱魃、サイクロン、大雨などの自然災害にたびたび見舞われる国で、2000 年と 2001 年に洪水災害が連続して、経済が大きな打撃を受けました。しかし、天然ガス、石炭などの資源を豊富に有して外国投資が好調であることを背景に、2000 年代前半に回復基調となり、今後はさらに高い成長が期待されています。

国際的によく知られた音響芸術で、南部の州の部族が奏でてきたティンビラという木琴の音楽があります。鍵盤の下にひょうたんで作った共鳴器が固定されていて、異なる音域の数種類の木琴の

音による合奏を楽しめます。造形芸術として、モザンビーク北部からタンザニア南部にかけて住む、マコンデ部族による黒檀彫刻もよく知られています。

この国の南部に位置するガザ州ショクエ郡の北東側の縁を流れるリンポポ川右岸に沿って、ショクエ灌漑地区が広がっています。2007 年 3 月から 3 年 1 ヵ月の期間で灌漑地区の小規模農家を対象に成功裏に実施された技術協力プロジェクトを受けて、2011 年 2 月から 3 年 10 ヵ月の予定で、小規模農家の稲作生産性の向上を目的とする技術協力プロジェクトが始まりました。

ショクエ灌漑地区稲作生産性向上プロジェクト（2011 年～2014 年）

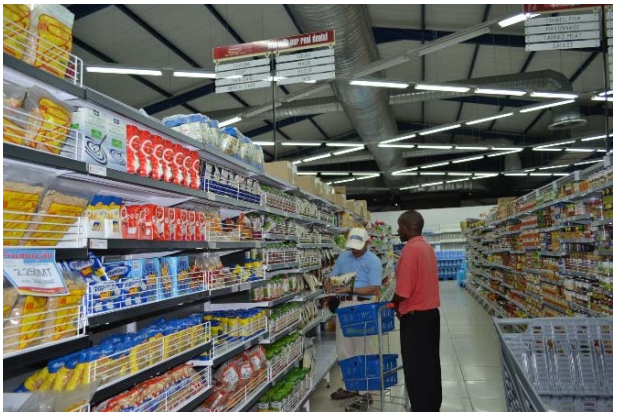
南アフリカ、ボツアナ、ジンバブエの国境線に沿い東へ向かって流れるリンポポ川は、モザンビーク南部のガザ州に入って南東方向に向きを変え、州の中ほどを斜めに区切るように流れてインド洋に注ぎます。「ショクエ灌漑地区稲作生産性向上プロジェクト」が実施されている灌漑地区は、このリンポポ川下流部右岸にあって、河口から 120 キロメートルほどのところに堰を築いて取水した水を灌漑水に使っています。

田植え　2011 年 11 月

2007 年から 2010 年までこの地区で実施された技術協力プロジェクト「ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発プロジェクト」は、灌漑地区上流部で稲作を中心とした農業技術の改善、灌漑水管理技術の向上、営農支援体制の強化などを目的にしました。終了時の評価によると、対象地区のコメの平均収量が指標として設定された数値を超え、稲作モデル農家のコメ販売による収入も増加しました。しかし、零細な経営規模（1 ヘクタール程度まで）のモデル農家を対象とした移植稲作技術が改良され、その有効性が明らかになったものの、灌漑地区の広い範囲への技術の普及、定着は十分ではありません。また、上流域以外の稲作農家の生産性向上を図るためには、１ヘクタールから５ヘクタール程度の農業規模に適した直播稲作技術の改良が課題として残されています。進行中のプロジェクトはこのような状況から計画され、2011 年２月から 2014 年 11 月までの予定で実施中です。上流域で既に改良された移植稲作技術の普及、中流域での営農規模に適した直播稲作技術の改良、実証、普及と稲作農家への営農支援活動の強化によって、対象地域をより広くして生産性の向上を目指します。

収穫前　2014 年 4 月

脱穀作業　2011 年 4 月



マーケティング調査　2011 年 4 月

フィールドデイ　2014 年 3 月

モザンビークでは、コメはトウモロコシに次ぐ主要作物であり、生産量は 24 万トン（2009 年）ですが、コメの消費量がこのところ増加傾向にあり、年間約 55 万トンに達しています。30 万トン以上になるコメの輸入量を抑えるため、自給率を早急に上げることが求められています。この国最大の灌漑地区（灌漑可能面積約２万６千ヘクタール）であるショクエ灌漑地区は、かつてはコメを含む農産物の生産が盛んでしたが、内戦や経済体制の変遷、リンポポ川の大洪水被害などによってその機能が損なわれ、生産量が大幅に減少したままなかなか元に戻らず、農村経済は停滞しています。灌漑施設の改修を進め、適切に運営、管理し、小規模農家を対象とする生産技術の開発を進め、普及事業や営農支援活動を抜本的に改善すれば、コメ増産の余地はかなりあります。

一年を通して温暖な気候に恵まれていますが、９月から４月まではほかの月に比べて特に暑くなります。降雨量は 11 月から２月の期間に集中します。稲の作付けは暑くなって降雨量も増える 11 月から 12 月に為され、涼しくなり始める今頃、４月、５月が収穫の最盛期に当たります。

アールディーアイ通信は、プロジェクトの終了まで、その進捗状況とショクエの農村の様子を、折に触れてお伝えしていきます。（広報部）

「アールディーアイ通信第 58 号　2012 年 4 月 15 日」から

モザンビーク・ショクエで稲作生産プロジェクト
～総括の増渕清さんに訊く～

増渕さんは、1982 年から 86 年まで４年間、タンザニアのキリマンジャロ州における技術協力プロジェクトの稲作分野担当者として、稲試験栽培と普及活動の業務を経験して、今回は 26 年振りのアフリカでの仕事になります。モザンビークへの出発を前に抱負と展望を広報部がインタビューしました。

――久方ぶりのアフリカへ、プロジェクト第 2 年次の後半、４月から 3 ヵ月間派遣されましたが、その印象あるいは感懐から。

ガザ州ショクエの町の外側に灌漑地区があって造成された水田が広がるが、農家はぽつぽつとしか見えない。その家がかなり劣悪な環境にあるようです。灌漑地区内のマサバセという集落では、この７月になってやっと水道が引かれました。地区内にはまだ川で洗濯をしたり、排水路の水に頼っている農民がいます。生活レベルを詳しく調べてはいないが、第一印象は、26 年前のキリマンジェロ州より悪いように思えます。1990 年代半ば頃まで続いた内戦の影響があると多くの人が言うが、モザンビークの人はそのことを詳しく話したくはないようです。

――ショクエ灌漑地区の稲作農業については。

稲作の人手が不足しているようであるし、小規模農家の機械化は全くと言っていいほど進んでいないようなので、稲作農民が農作業で助け合っているかどうか、助け合っているとしたらどういう共同作業をしているか、調べてみました。灌漑地区の場所によって違いはあるが、共同作業のレベルはかなり低い。この地区の農民は農作業を近隣であまり助け合わない。個人個人、家族でやる農業です。

用排水路脇で洗濯　2011 年

――共同作業が少ないというのはほかの国と比べてということでしょうか？

昔のキリマンジャロ州の稲作と比べてしまうのですが。稲作では水路の管理など、近隣農家の互いの協力がないと地域全体の稲作がなかなかうまくいかない。住民が代々その地域に長く住んで稲作をしていれば自然と共同作業ができると思うのですが。ショクエでは農家が点在しているし、田んぼから離れた地区に住んで、１時間、２時間かけて歩いて農作業に通う農民もいます。灌漑地区の農家はもともとからショクエの地に住んでいた人たちだけではないようです。

――プロジェクトの目的は、小規模農家が稲作を通じて収入を増やし、生活を向上させることですが、プロジェクト後のことも長期的に考えて、稲作の可能性は。

2007 年からの前のプロジェクトで稲作の増収技術はいろいろ提示されています。もとの収量水準が低いからヘクタール当り平均２トンから３トン程度に上げることはそんなに難しいことではあり

ません。しかし、籾の買い上げ価格が低く、生産者にとってすぐによくなるとは思えない。農家の収入増には収量を大幅に上げるしかない。現状で与えられた条件の下で平均収量を大幅に上げるのはかなり難しい。小面積で手間をかけて収量を上げるか、面積を広げて手間をかけずにするか、どちらがいいか、試しています。

農作業へ早朝の出勤風景　2008 年

――増収技術が直ちに所得増大にはつながらないということですか？

この地域の小規模農家の生活水準向上に、農業技術のウエートは必ずしも高くはないと思う。農外収入や出稼ぎ者の送金が多く、新技術で稲作から大きく稼ごうという様子は見られません。奨励技術をなぜ農家が実行しないのか？実行できないのか？やる気になれない何かがあるのか？様々な要因が考えられます。稲作技術以外で何が制限要因になっているかを調べて、少しでも解決する方向に向かうことが重要だと考えています。

「アールディーアイ通信第 61 号　2012 年 10 月 15 日」から

ショクエのメーデー

５月１日は、国際的な労働者の祭典として集会やデモ行進が行なわれるが、モザンビークでも各地域で集会があったようです。「ショクエ灌漑地区稲作生産性向上プロジェクト」に従事している大竹雅洋職員（普及／農民組織分野担当）と田中占領職員（業務調整／研修分野担当）に、ショクエの町のメーデーの様子を広報部でインタビューしてとりまとめました。

プロジェクトの本部があるショクエ郡経済活動事務所もメーデーに参加するため、前日にスタッフからプロジェクトのメンバーにカンパの要請があった。ひとり 250 メティカイシュ（約 800 円）を寄付すると、お揃いのポロシャツを渡され、メーデーの式典後、職場で昼食が用意されると告げられた。

水道公社のグループ　2013 年

当日の朝、行進に参加するグループごとに揃いのシャツを着た人々が、スタート地点であるメインストリートの西端に集まった。通りの東端に近い郡庁舎までおよそ 700 メートルを歩く。いつもは車の往来で混雑する道だが、警察官が出て通行止めにし、また見物人の整理をしていた。グループは、水道公社、灌漑公社、郡経済活動事務所、市役所など公務員組織が多く、数少ない民間会社のうち、稲生産や精米をするモズフード事業会社と街の２大パン屋のうちの１軒が参加していた。グループの先頭には、組織の特徴や“メーデー万歳”といった言葉を書いた横断幕が掲げられていた。郡経済活動事務所には農業普及を担当する部門があるので、カボチャや　トウモロコシ、レタスなどを飾りつけたトラクターと共に行進した。

野菜で飾り付けしたトラクター　2013 年

デモ行進にはシュプレヒコールが付き物だが、おしゃべりをしたり、手拍子とともにこの地方の言葉で歌を歌ったり、歌に合わせて踊り出すグループもあった。この地域には大きなお祭りやこぞって楽しめる催しが少ないため、皆で楽しめる場を得たとばかり、参加者はお祭り気分で行進したのかもし

少人数でもリズムを合わせて　2013 年

れない。約 20 分かけて、郡の偉い人たちが出迎える庁舎前の広場に到着した。行進に参加した軍隊による空砲が聞こえ、国歌斉唱をし、さあこれから式典が始まると思いきや、行進参加者も見物人も三々五々帰り出した。グループによっては別の場所に移動して演説会があったが、“がんばろう三唱”のような掛け声もなく、短時間で終わったようだ。

この後事務所に戻り、昼食会。職員にとっては行進や式典よりもこちらがメインで、楽しみにしていたようだ。会場には女性陣が腕を振るった、野菜サラダ、ポテトフライ、チキン炭火焼などの料理が並び始めていた。その豪華さから、所長が日頃の労をねぎらうために多めにカンパしたのではないか、と推測される。しかし今か今かと待つがなかなか準備が完了せず、始まらない。３時過ぎになって、所長の短い挨拶と乾杯でようやく会食が始まった。皆昼前から待機して極端な空腹状態だったので料理はあっという間になくなった。少量のビールも飲んだ気もしないうちになくなった。

行進も式典も会食も、なんとなく始まって気がついたら終わっていて、参加者もさっと散っていなくなってしまった、そんなメーデーだった。

「アールディーアイ通信第 66 号　2013 年 8 月 15 日」から

手作りの料理が並ぶ　2013 年